余韻。

水鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
余韻。

【Ｎコード】
Ｎ１０４０Ａ

【作者名】
水鳥

【あらすじ】
夢を昔に手放してしまった男がいま、そのころを思い出して考えをめぐらせる。そんな話です。

（前書き）

星に手は届かないと分かっていたはずなのに、また手を伸ばしている自分がいた。
余韻はいつまでも鳴り響いて時にうるさいのだが、心地よいメロディーも運んでくれる。

あの星が掴みたかった。

でもどうしてあんなに空高くにあるのか。

手を伸ばしても、背伸びをしても届くはずはなくいつしか忘れていく。

また、ときおりあの日の思いがめぐる。
いつまでもいつまでも思い悩んだ末に出した結果だったはずだ。
夢を落としながら人間は伸びていくのだと自分に言い聞かせたはずだ。
しかし、やはり欲深いものだ。
いつまでたっても忘れられやしない。
いま私がしているのはどんな顔だろうか。
あの頃を思い出して苦い顔でもしているのかもしれない。

夢にはぐれた。

どうしてもそこへは追いつけなかった。

最後には自分から手放していた。

努力が足りていなかったといえばそれで全部説明がついてしまう。
でも、どうしてもその考えには行き着きたくはなかった。
弱虫と呼ばれてもなんでもよかったけれど自分で自覚してしまうの

には少しつらすぎた。
その頃を思い出すといまでも胸が痛み、やるせない気持ちになるのだがいつまでも忘れられない思い出となっている。

いま、こうやって昔を感じると周りがまるでモノクロのように沈んだ感じになっていく。
あの頃のほうが比べるまでもなく眩しかった。
でも、きっと少しばかり眩しすぎたのだ。
あの星の光くらいがちょうどいい。

あの星に手が届かない。

でも、それまで待つのも悪くない。

このまま終わっていくのも悪くはない。

そう思っている。

自分に甘えた人生を送ってきたか。

そろそろ、人生の折り返し地点を迎える。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1040a/

余韻。

2010年10月11日07時15分発行